

PETRONAS SYNTIUM TEAM

PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2008
第4戦「十勝24時間レース」
2008年7月20-21日

■決勝:7月20-21日 天候:曇 気温22°C(20日午後3時現在)

国内唯一の24時間耐久レースとして知られる「十勝24時間レース」。今年で15回目を迎える歴史あるこのレースは、現在、スーパー耐久の一戦としてシリーズ戦に組み込まれている。前回、第3戦の富士では、念願の1-2フィニッシュを飾ったPETRONAS SYNTIUM TEAMとしては、連勝を狙いたいところだ。

今回、チームではドライバー編成を一部変更。24時間という長丁場を円滑そしてパワフルに戦うため、28号車には谷口信輝と吉田広樹のコンビに、助っ人としてS耐そして十勝24時間レースでのキャリアが豊富な織戸学が加入、そして50号車は、レギュラードライバーのファリーク・ハイルマンと柳田真孝に、普段は28号車をドライブする片岡龍也が加わる事となった。

十勝24時間レースでは、通常のS耐シリーズ戦と異なり、予選が行われない。スターティンググリッドは、第3戦までの戦歴に応じて振り分けられる。結果、28号車がポールポジションを獲得、現在、ランキング3位の50号車は、28号車の後方からスタートを切ることとなった。これに先駆け、18日(金)には専有走行が行われたが、両車とも安定したタイムを刻むだけでなく、スタッフが丁寧なメンテナンスを行うことで、決勝に向けての準備を着実にこなし、

■午後3時～午後7時

「28号車、終始レースをリード。50号車は2番手へポジションアップ」

午後3時、ローリングラップによるスタートが切られ、ポールポジションの28号車には谷口、そして3番手・50号車には柳田が乗り込み、24時間の戦いの幕が開けた。オープニングラップ、谷口はトップをキープするが、柳田は周囲のペースに反し、5番手までポジションダウン。しかしながら、周回を重ねていくうちに、谷口と遜色のないタイムを刻み始め、瞬く間にポジション回復。ついに12周終了時点には予選2位スタートのライバル、1号車のフェアレディZをパスし、2位へと浮上。これでPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEが1-2体制を築いた。

最初のピットストップは、スタートから1時間25分後。まずは28号車・谷口が39周終了時点でマシンを戻す。ピットワークは給油のみで、そのまま谷口が2ステイメント目へと突入した。その僅か2分後、50号車・柳田もピットイン。同じくルーティンワークの給油を済ませ、コースへ復帰。作業の間に、1号車のZがトップを奪取したが、その1号車がピットインする45周目のバックストレートで谷口が1号車を逆転。また、1号車はドライバー交代とタイヤ交換を行ったため、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台との差は2分近いものとなった。

午後5時、僅かだが雨がサーキット上空から落ちてきた。だが、レインタイヤを装着するほどではない。ペースをやや落とし、無理のないペースを維持させながら走行を続けた28号車・谷口と50号車・柳田は、午後6時を前に、2度目のピットインを迎える。今回は柳田が80周終了、そして谷口が81周でピットイン。ともに給油に加え、タイヤ4本を交換。さらにドライバー交代を行い、50号車には片岡が、そして28号車には織戸が乗り込み、決勝での初仕事に向かった。

午後6時、28号車・織戸がレースを引導。50号車・片岡は約38秒差で2番手をキープしている。100周を過ぎ、ほどなくしてPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台は、3位を走行する1号車のZをパス。これにより、参加台数28台のうち、26台をラップダウンすることとなった。

レースは午後7時を前に、1台の車両がコースアウト。レスキューのため、午後6時52分、セーフティカーがコースインする。これより前、トップの28号車をドライブする織戸と、2番手50号車の片岡との差は約34秒。3番手、1号車のZとの差は1周以上あったが、セーフティカー導入により、この差が一気に縮まってしまった。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

■午後7時～午後11時

「セーフティカーが初導入、ナイトランがスタート。PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEはトップ2をキープ」

コースアウトした車両撤収のため導入されたセーフティカーは、午後7時10分に解除。これより少し前、コース上の車両にはライト点灯の指示が出され、いよいよ耐久レースならではのナイトセッションが幕を開けた。

50号車・片岡は、セーフティカーラン中にピットイン。給油を済ませ、コースに復帰したが、28号車・織戸は午後8時を前にルーティンワークのピットイン。ほぼ同じペースで周回を続ける2台だったが、ここへ来てピットインのタイミングがずれたことで、時折2台のポジションが入れ替わることになる。

午後8時40分、2スティントを終えた50号車・片岡がピットイン。フルコースのルーティンワークを終了し、いよいよハイルマンへとスイッチ。十勝での初のナイトランに挑むこととなった。一方、28号車は午後9時半を前に織戸がピットイン。こちらも、チームのルーキーである吉田が初のナイトランへ向かった。

午後10時15分、50号車・ハイルマンがピットイン。柳田へスイッチする。一方、28号車・吉田は初のナイトセッションながら2スティント目にチャレンジ。午後11時前にピットインし、給油を済ませると、コースへ無事復帰した。ところが、この後、ピットイン時の速度違反が判明。惜しくもピットストップペナルティが科せられることに。これによって、1号車のZが2位へ浮上。吉田は3番手から追い上げの走りを見せることとなった。

■午後11時～午前3時

「コース上の2台は快調に走行。50号車がレースをリードするも、ラップモニターにトラブル発生」

午後9時を過ぎ、十勝スピードウェイのラップタイミングシステムにトラブルが発生。計時が正しく表記されず、午前1時までのリザルトが発表できないというハプニングに見舞われた。しかし、これとは対照的に、コース上ではPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台が順調に周回、1号車のZを交えて激しいトップ争いを展開した。

日付が変わり、トップにつける50号車は片岡がドライブ。28号車は吉田からスイッチした谷口が1号車のZを逆転し、2位へ振り返り咲き。その後、レースはしばし静かな戦いの時間が流れることとなった。

■午前3時～午前7時

「2度目のセーフティカーラン導入。トップの50号車はブレーキを交換」

午前3時。十勝の長い戦いでは、折り返しとなる12時間目にトップを走行中のクルマに対して、特別ポイントが与えられる。今年は、50号車の片岡がトップ走行中に12時間を経過。これにより、貴重な5ポイントが加算されることになった。

レースは折り返しを過ぎ、間もなくして最終コーナーで大きなアクシデントが発生する。ストップした車両から失火。これにより、今大会2度目のセーフティカーが導入されることとなった。一方、50号車・片岡は、この少し前に2スティント目に入ったばかりだったが、チームでは、ブレーキ交換を実施。セーフティカーが5周にわたって導入されたが、50号車はトップのままコース復帰に成功した。

驚くべきことに50号車・片岡は、その後午前6時40分前までドライブを続行。長い3スティントを見事走り切り、ハイルマンへと再びスイッチした。また、28号車は午前2時半頃、谷口から織戸へとスイッチを済ませ、2位をキープ。だが、ライバル1号車のZも堅調で、つねに接戦を続けることになった織戸は、午前4時には3番手へ後退。しかしながらピットストップ時のルーティンワークによってポジションが簡単に入れ替わる可能性も高い。チームでは、午前6時30分を前に交代した吉田の踏ん張りに期待した。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

■午前7時～午前11時

「曇天の朝を迎えるなか、依然、激しいポジション争いが続く」

長かった夜の帳が明け、朝を迎えた十勝スピードウェイ。傘の必要はないものの、夜が深い間は霧雨が降り、ドライバー泣かせのコンディションの中、レースが続けられた。

レインタイヤを装着するほどでない路面コンディションゆえ、かえってドライバーは精神的な負荷がかかりやすくなる。幸い、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台はドライバーがハードワークをしっかりとこなし、順調に周回を重ねていった。

午前8時を前に、28号車がピットイン。谷口へとスイッチし、タイヤ交換、給油などのルーティンワークに加え、ブレーキローターの交換が行われた。一方、50号車は、午前8時12分にハイルマンから柳田へとスイッチ。こちらもルーティンワークだけでなく、ブレーキローターを交換した。すべての作業を終え、柳田がコースに向おうとしたとき、ブレーキロードに若干の不具合が出たが、スタッフの冷静な作業でトラブルも解消。この間に1号車のZがトップを奪うも、柳田はのちにコース上で1号車のZをあっさり逆転。再び、トップに返り咲いた。

午前9時。474周を完了し、なおもトップ3台が同一周回数でのハードな戦いを展開している。PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEは、1-2体制をキープ。しかもトップ2台の差がほとんどない緊迫した状態だ。

そして迎えた502周目。午前10時を迎える頃、28号車・谷口が50号車・柳田を捕えて逆転。2台はしばし僅差での周回を続け、レース開始から19時間を過ぎてなお、トラブルフリーで好走するPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの勇士を十勝のファンに披露した。

■午前11時～午後3時

「トラブルフリーで24時間を走破。PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE、1-2フィニッシュ達成！」

午前11時、28号車・谷口がピットイン。ひと通りのルーティンワークを終え、織戸がコースインし、2番手を走行する。一方、50号車は午前11時15分に柳田が帰還。こちらも同様の作業を済ませ、片岡がコースへと向った。

約15分の時間差でルーティンワークを行ってきたPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台。チェッカーまで残り3時間を無事に通過、午後12時30分には28号車・織戸がピットにマシンを滑り込ませた。今回の作業は給油のみ。すばやくピットを離れた織戸に対し、きっちり15分後にピットインした50号車は、給油とタイヤ交換を実施。コース復帰後は、この作業時間差が2台の差になって現れ、28号車の織戸が首位に返り咲き。レースを引っ張った。

午後1時40分、28号車・織戸がピットイン。これまで1スティント・1時間30分を目安としていただけに、やや早めのピットインとなる。午後3時のチェッカーに焦点を合わせ、作業のタイミングを調整しているのだ。28号車は新たに谷口がマシンへと乗り込む。そして給油とタイヤを交換し、ピットを離れた。また、その翌周には、50号車・片岡がピットへ戻ってくる。しかしこちらは給油のみの作業で済ませ、コースへ復帰。このスプラッシュによって、チームメイトにして最強のライバルである28号車に差をつける作戦に出た。

午後2時を過ぎ、トップをキープする50号車・片岡と、後を追う28号車・谷口との差は約4秒。だが、フレッシュタイヤを投入した谷口は、ギャップを埋める勢いの走りを見せ、瞬く間に僅差の攻防戦へと持ち込んだ。

チェッカーまで残り30分強。すでに3位・1号車のZとの差は1周になっている。だがチームメイト同士の緊迫した戦いは、24時間のフィナーレをさらに盛り上げる格好のものとなったに違いない。

ラスト5分、28号車・谷口が50号車・片岡を1コーナー飛び込みで逆転。だが、片岡もすぐさま逆襲に出て、再度トップを奪取する。最後の最後まで谷口は片岡の背後から逆転のチャンスを伺ったが、時計は午後3時を過ぎ、24時間の戦いは、なんと0.638秒という僅差で終了。十勝24時間レース15周年となる今年、24時間にわたり、速くて強いマシンポテンシャルを見せ付けたPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEが、見事、1-2フィニッシュを飾ることとなった。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

●鈴木哲雄監督

24時間のレースを戦うにあたり、パーツを新調するなど、当たり前の作業を丁寧に行ってきました。それでも何が起るかわからないのが24時間レースですが、今回は2台が揃ってトラブルに見舞われることなく、素晴らしい走りを見せてくれました。ドライバーもみな、自分自身の仕事をキチンとこなして素晴らしい仕事してくれたと思います。これまで長らく十勝24時間レースを戦ってきましたが、なかなかこういうレースはできるものじゃありません。本当にうれしく思います。

●No.50 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

F・ハイルマン

去年の初十勝は、クルマのトラブルもあって、ほとんど走る機会に恵まれませんでした。今年は練習時に夜間走行の時間が短く、そのせいもあって、自分が担当した最初の夜のステントは、なかなか大変でした。それでも集中力をキープし、きちんと仕事をこなせることができました。勝ててとてもうれしいです。

柳田真孝

まるでスプリントレースのような戦いでした。タフな1戦になりましたね。その中で戦うことができ、とてもいい経験になりました。もちろん、優勝して、スポンサーさんの応援に応えることができ、うれしいです。去年はクルマのトラブルが多発し、とても悔しい思いをしましたから、今年はパーフェクトなレースができて、チームにも感謝しています。気の抜けないレースができたのは、トップ3台がみんなすごいレースをしたからこそ。その中で優勝できたことは、本当にうれしいです。

片岡龍也

Mr.十勝です(笑)。去年は違うクルマですが、2連勝できたのはうれしいですね。今回は50号車をお手伝いするという形でしたが、結果的に一番多く乗ることになりました。最後のピットインではタイヤ交換せず挑んだわけですが、集中して頑張りました。展開的に1度くらい何かトラブルがあるのではとも思いましたが、トップ3台がノートラブルだったのは驚きですね。終盤、もっと楽なレースができるだろうと思ったのですが、気の抜けない戦いになりました。チームとしては信頼性をしっかりアピールすることができて良かったと思います。最後はもう1周あるかなあ、と思っているところにチェッカーフラッグが出されたので、余韻に浸る暇がなくて残念でした。

●No.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

谷口信輝

なかなかキツイレースでした。でも、クルマ自体は何もトラブルなく走ることができ、自分に与えられた仕事はきちんとできたと思います。レース中、ブレーキが硬く、結果的に長時間の操作で足裏に水ぶくれができてしまって、痛い思いをしました。最後のステントでは、50号車とのバトルもお見せできて良かったと思います。

織戸学

2台ともトラブルなく24時間を走りきれたことは驚きでした。Z4を事前にドライブする時間はあまりなかったのですが、素性のいいクルマで、すぐに慣れることができました。初めのステントではドリンクシステムの問題があって、ドライブも大変だったのですが、それ以降は何もなくスムーズに走ることができました。出された指示通りの仕事もきちんとこなせて、レースを楽しむことができました。このようなチャンスをいただき、感謝しています。

吉田広樹

今回は織戸さん、谷口さんという経験豊富な先輩ドライバーと一緒にコンビを組むことができ、たくさんのお話を学ぶことができました。十勝も、24時間レースも初めてだったのですが、これまでのS耐と違い、特別なレースだったと改めて感じました。夜のステントも自分に与えられたチャンスだと思って頑張りました。しかしながら、コースオフやピットロード速度のペナルティなどミスもあり、先輩ふたりにはご迷惑をかけることになりました。今回たくさんのお話がなかったので、今後に活かせるよう、もっと頑張りたいですね。